

NPO法人



2015年 6月 1日
第26号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター



Jomon Shiba

第26号

もくじ

関西から全国の皆様へ「関西交流会」へのお誘い ☆関西交流会事務局長 土山仁美 2

シバの散歩道(26) ☆JSRC理事 根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家) 4

縄文人の狩猟-2 ☆東京国立博物館客員研究員 金子浩昌 8

お便りコーナー ☆初めての春 岩手県 佐々木俊幸 ☆秋田県 小松愛美 12
 ☆タオの独り言 愛知県 西谷智子 12
 ☆秋田県 藤原庸子 ☆散歩の森 石川県 黒梅 明 13
 ☆「良子」の近況No.17 富山県 竹内誠一 14
 ☆人と犬との関わりに就いて(2) 大分県 石井 勲 15

総会・理事会会議報告 17
 総会報告 17
 理事会報告 18

事務所報告 ☆会費 ☆寄付金 ☆寄贈 ☆お知らせ ☆諸料金一覧 ☆血統登録について 21



会誌27号の発行予定は、9月10日です。原稿の締め切りは、45日前(7月25日)です。

「愛犬のしおり」を同封しました。参加・不参加に関わりなく、必要事項を記入して6月15日必着するように投函してください。

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所

郵便振替口座 02280-2-106951

〒 014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5

TEL 0187-68-2976

<http://www.jomon-shiba.com/>

encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

関西から全国の皆様へ — 「関西交流会」へのお誘い

関西交流会 事務局長(和歌山県) 土山 仁美

新緑がいよいよ濃くなり、気候も夏めいてまいりましたが、会員の皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。去る4月19日の総会では、本年度の交流会を、関西で開催することが決まりました。JSRCが発足して以来、この地で交流の場を持つことは、初めてなので、いま、大きな喜びをひしひしと感じています。

会誌のお便りコーナーに、何度か投稿しましたが、私と縄文柴犬との出会いは約三年前、同じ市内に住む和田さんのところの「琴」を見せていただいたことに始まります。予てより犬を飼っていたがっていた娘の頼みもあって、すぐに和田さんからJSRCにお願いをし、現在、飼育する「太郎」の里親になりました。わからないことがでてくると、五味さんや和田さんに聞いたりし、何とか成犬になりつつあるのではないかと、ホッとしています。

地元を離れて働く娘は、少しでも時間ができると太郎に会うために帰ってきます。太郎といるとつらいことを忘れて、元気が出てくるのだそうです。そんな娘が「私、いつか、太郎の子供か孫を飼いたいんよ」というのです。ごく自然にでたこの言葉に、未来につなぐ大事なこと、やさしく温かみのある気持ちに、思わず我が娘を頼もしく感じた春の日でした。

私たち和歌山では、昨年、総会で決定された作出への方針にそって、仔犬の里親探しの一環として関西在住の会員の皆様と連絡を取り、近況を伺いました。電話で初めてのことでしたが、どの方も温かく受け入れてくださり、話が弾みました。お互いの犬のことなどを話すうち、「近いのだから、是非、機会があれば会おう・・・」という多数の声をいただきました。最初は、見知らぬ方に電話をすること自体、躊躇しながらでしたが、皆様のこの反響に私自身も、お会いして交流できたらと思うようになっていきました。

交流会を、現実のものにしてくださったのが京都府在住の金さんでした。金さんは予てより、こうした機会が持てたらとのお考えをお持ちでした。ご自分の山荘を交流会場に、是非にと申し出てくださったのです。

先日、その金さんの山荘「巒鳴荘(らんめいそう)」を、奈良県の榊井さんと一緒に訪問させていただきました。自然豊かな里山で人も犬ものびのびと過ごせる申し分のない環境が広がった中にありました。

JSRCの交流会。初めてのことで、至らない面、多々あると思いますが、関西人の温かい心で皆様をお迎えしたいと思っています。是非、お越しください。ご連絡をお待ちしています。(2015. 4. 27)

先日3人で協議し、交流会の会場に決めた!



中央:筆者と愛犬の雷神



巒鳴荘について — 金 平雄

(らんめいそう)

当小屋は2011年に、山遊びの拠点にと思い建てたものです。周りからは雑木林が取り囲んでいて、栗、榎の落葉樹が生い茂り、少し離れた所に麻生川の清流が見られます。

8坪足らずの面積で2階建て、外壁は全面杉皮で覆って、宿泊を伴う昔の木こり小屋の風情です。放置された里山なので、折々に野外席料理、山菜摘み、キノコ狩、鮎とりなどに人を集め、自由気ままにそれぞれ

に興じることができています。

人家のない雑木林では、思いのたけ犬達は斜面を駆け回って戯れ合うことうけあいです。強いていえばそれだけが取り得とってください。

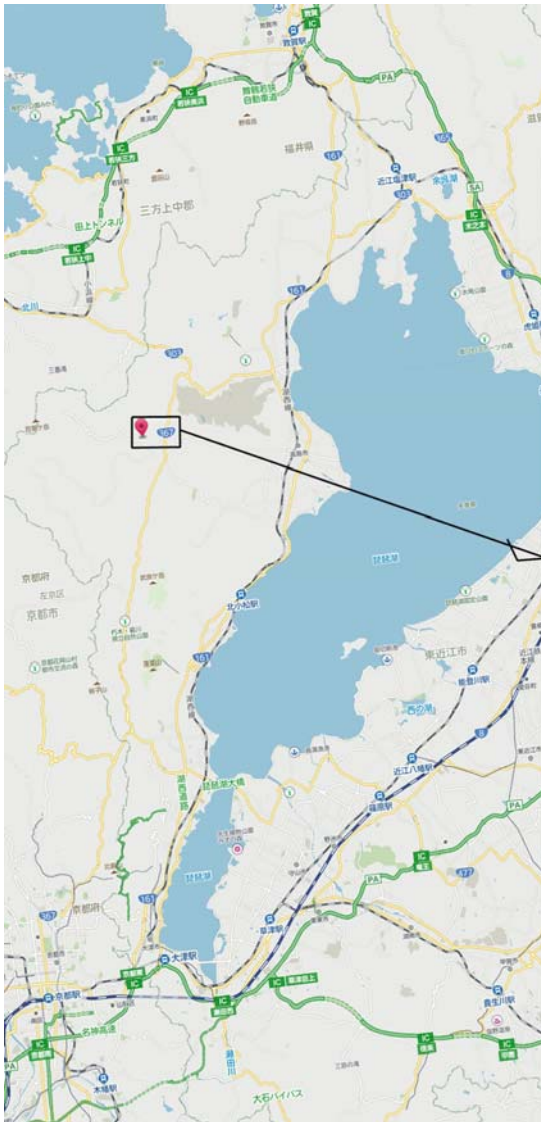
因みに巒(らん)とは小さな山の連なりを言います。山小屋では、蛇、百足、蛭、などの鳥獣虫魚、山川草木の一切を友としています。山野草、山菜の植栽も手掛けてきました。是非お越し下さい。(次頁住所参照)

尚、山荘での宿泊に際しては、寝具は4人分位です。各自毛布・寝袋持参が望ましいです。(最低気温目安は約15℃です)

交流会 案内

集合：7月4日(土)午後1時(時間厳守)
場所：道の駅朽木(幟「駐車場」が目印)(略図参照)

(会場・館)住所：滋賀県高島市朽木麻生「戀鳴荘(らんめいそう)」
↓
(付近に「縄文柴犬」の幟が目印)



道路概況

- 東北方面から北陸自動車道ご利用の場合
 - ・北陸自動車道→敦賀JCT→舞鶴若狭道→若狭上中料金所→国道367号線へ
- 中国地方から中国自動車道ご利用の場合
 - ・中国自動車道→吹田JCT→名神高速道→京都東料金所→国道367号線へ
- 名古屋方面から名神高速道ご利用の場合
 - ・名神高速道→米原JCT→北陸自動車道→国道367号線へ

集合場所の道の駅朽木から→県道23号線になります。
電車や空路ご利用の場合:現地担当者と打ち合わせしてください。

交流会の日程

第1部～お茶を飲みながら、ゆったりと～

- (14:00～) 開会挨拶 - 記念撮影
- (15:00～) 自己紹介を兼ねて、愛犬自慢

・質疑応答-五味さんから

総会でのこと、縄文柴犬に関するお話

第2部～夕食&懇親会～

(18:00～)バーベキュー(猪肉を予定)

翌朝：朝食におそうめん、食後、散会します。

備考――

宿泊:参加人数により、または希望者には近くの有料

宿泊施設なども相談に応じます。

注意・持ち物など――

- ・会費：全日程 参加費 5,000円(当日受付にて)
 - ・飲み物について：各自、必要な量をご準備下さい。自然豊かな山なので、服装は、素肌が覆える身支度にして下さい。(夜は冷えますので、調整衣服をご準備ください。)
 - ・自分用として：寝袋(毛布)・テントのある方は、持参して下さい。また飲料水(ペットボトル)、虫刺され薬、帽子、タオル、懐中電灯、汚れても良い手袋など。
 - ・犬の管理は各自の責任に於いて対応して下さい。
 - ・「愛犬のしおり」用紙を同封しました。参加・不参加に関わらず、必要事項を記入して、6月15日必着するよう、表記事務所宛まで投函して下さい。
- 不明な点は、表記事務所までご一報下さい。

シバの散歩道 (26)

JSRC理事 根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)

私が指摘し続けている「犬猫看板」やゴルフの打球の問題、さらにはそれを放置している行政や為政者、市民を含むわが故郷の、改善しようもしない社会の体質は旧来の陋習に起因する。私が少年のころ、いざこざを起こし不満を述べるたびに母親は私に言い聞かせた。

「おめえが我慢すれば、それで済むんだからナ、我慢しろ、ナ」

大正生まれの母親の生き方ではあるが、先述したように、ゴルフの打球が飛んできて被害を受けている、いま現在の農家の人たちとなんら変わらない。「無告の民」に甘んじている。

いくらなんでも世間なみに変革したほうがいいのではと改善を期待する一方で、変革のうねりが起きないのはなぜか、といった疑問が湧くのである。生き恥をさらす覚悟で、この際、市議選に出馬しようと思いついたのは、この地域に蔓延する陋習に一矢報いることで体質改善を促したいからだった。それに関して以前から文章を書いたり発言するなどしてきたけれど効果はなかった。残る方法は市議として自ら渦中に飛び込むことで活路を見出す以外に道はないと判断したのだ。

とはいっても、市議選に出馬するにはどうすればいいのか、五里霧中、その手続きにしても皆目見当すらつかない。「犬猫看板」やゴルフの打球の問題で協力を得た市会議員に相談するわけにもいかないだろう。自らの票を減らすことにもなりかねないのだから相手を困惑させるだけである。何人かの友人知人に伺ってみるところで私同様、門外漢であり、参考になるものは何もなかった。世間はいったいにこの程度のものかと思う。

カネを出せば、その道のプロを雇うこともできるのだとか。しかし私の財力では、供託金でさえ覚束ないのであり、加えて、そのような方法は私の道義にもとる。公明正大であるべき選挙が思いのほか、閉ざされたものであるとの印象を受けた。

さて、どうしたものかと思い悩んでいると閃いた。そうだ、選挙管理委員会に問い合わせるのが筋ではないのか。ド素人の私にも理解できるように教えてくれるに違いない。

私は電話した。「もしもし、こんどの市議選に出ようかと思っているのですが、ずぶの素人でわけがわからないことばかりです。何か手引きになるような資料とかはないんでしょうか」

応対した職員は面食らったようだが、親切な方だった。自分たちも詳しくはわかっているわけではないけれど、と前置きして、自分たちが参考にしている『地方選挙早わかり』(全国市区選挙管理委員会連合会編・日本選挙センター出版部)を紹介してくれたので、さっそく注文して取り寄せた。

なるほど、こういうことか、と納得いくように懇切丁寧に記されている。弘前市の場合、供託金30万円。立候補予定者説明会や告示日、投票日までの日程、選挙運動に関することなどすべて網羅されている。しかし、これを理解したからといって実践に通用するわけではない。ペーパードライバーのようなものである。

議員経験者や選挙管理委員会のOBにも参考意見を伺う。味方になってもらえそうな友人知人にも、ごく少数ではあるが、立候補の意志を打ち明け、相談に乗ってもらおう。ここでわかったことは女性の知人が積極的であり、男性は協力はするが、名前は表面には出せない、などといって消極的で尻込みする。これではまずい、団結できない。

後援会なし。選挙責任者、会計担当を、候補者の私一人が兼任するしかない。孤軍奮闘丸出し。都会ならともかく、外見や体裁に左右されやすい田舎社会では通用するわけがない。私を含めて誰もがそう思っている。

それに加えて厄介なことに、私に対する噂がたいへん悪い。毛嫌いされている。それは以前から私も重々承知していたけれど、私が世間に波風を立てるからである。「犬猫看板」にしてもゴルフの打球の問題にしても、月刊『弘前』というタウン誌に連載したことがあるので市民の多数は知っている。

それで「ごんぼほり」、「だんじゃく」ともこの地方では言うけれど、つまりむずかる、無理難題を吹っかける奴だと噂されているのである。そのつぎに「ごんぼほり」からこんどは「イチャモン男」に変わり、いまでは新しいネーミングで「クレーマー」と呼ばれているそうである。発信源は市役所関係者。自重したほうがいいのでは、と案じてくれる人たちもいる。案じてくれるのは感謝するが、自重もヘツタクレもない、私にとっては火に油を注ぐようなものでしかない。

立候補しようとする私の噂を聞きつけて足フパリの牙をむき出し、ののしった人たちもいる。なかには堂々と露骨に、面と向って言った人もいる。土着津軽人の悲しい性を目の当たりにするようで私は参考意見と

掲示板に張り出された立候補者のポスター



して聞いていた。「おめえはマチの評判がよくネ」「ジェンコもねえくせに上向いて歩いている」「選挙は理屈じゃない、ジェンコのねえ奴は落ちる」「ジェンコもねえのに、おめえは津軽のエフリコギだ」やたらと、恥ずかしげもなくジェンコに拘るのが特徴のようだ。根が貧相なのだろう。一つだけ、私は、言葉を返すようですが伺ってよろしいですか、と前置きして口答えした。「ジェンコもねえくせに上向いて歩いている」と言った人、七十過ぎのごく親しいオバサンに対してだったが、こう言い返したのだ。「坂本九が歌った『上を向いて歩こう』あれはどうなんですか。いけないんですか」

オバサンはお化粧みたいな厚化粧のどぎつく塗った紅い唇を震わせ、「ああ、もうマイネ(だめだ)、話にならねえ。一票欲しくて電信柱サでも頭下げるのが政治家だヨ。おめだバ、話にならねえ。でも、仕方がねえべ、おめえサ入れるしかねえべ」

田舎選挙では地縁血縁、不正がものをいう世界である。つい先ごろも、隣接する平川市で市長選をめぐり、20人の市議のうち15人が公職選挙法で逮捕される事件が起きた。「わがマチは恥ずかしい。改善さねバ」とテレビのインタビューで訴えていた議長が、その数日後には逮捕されている。

「津軽選挙」といえば不正選挙の代名詞である。この地方は、その本場であるからには弘前市においても皆無とは言い切れないだろう。「赤信号みんなで渡れば怖くない」といった感じで、市長が音頭を取って、自らの選挙のときの後ろ盾の人物が赤字経営するゴル

フ場に税金を投入しているのも、議会の承認を得ているからとはいえ、道義的に許されるのだろうか。その本質においては、平川市の逮捕された前市長は私費を投じているが、弘前市長は税金を投じているのだから、考え次第では後者のほうが悪質のような気がする。いずれにしろ、私が出馬しようとした市議選にかぎって総じて判断すれば、組織力を持たないだけに自爆行為に等しいことは想像に難くない。無謀といえる。断念するほかない。

そう考えると、市議にかぎらず議員の存在が私の力量を超えた大きなものに思えてくる。だからといって、成されるがままに「ごまめの歯軋り」で留まるわけにはいかない。

心ある友人知人の何人かは私の断念を訊いて、正直ホッとした、と言って安堵の胸をなでおろしていた。私自身も、「犬猫看板」で協力してくれた議員には、私の出馬が相手の票を食うことになりはしないかと些か気がかりにはなっていた。しかし、それは当然ながら断念した理由ではない。「犬猫問題」を議会でとり上げた三人の議員は、このたびの統一地方選で二人が市議選、一人は県議選で当選した。

選挙前、私の出馬が議会の開催期間中に噂に上ったそうで、世話になった議員の一人から真偽のほどを確かめる電話があった。私はウソ偽りなく答えた。「とても敵わないとの結論で断念しました。組織もないし、一人では所詮無理です」

ちなみに、今回の市議選は過去最低の投票率を記録し、47.88%だった。

※ ※ ※

私は自分の故郷の現実に対し、「犬猫看板」やゴルフの問題にかぎらず違和感を覚えることが多々ある。日ごろ、他人と接触する機会の少ない私なのだが、外部から相談を持ち込まれたりすると無碍に断るわけにも行かないので協力を惜しまず相談に乗る。

ところが私の意図するところを逆なでするような事態に陥り、私としては不快になることがある。そのいくつかの事例を紹介する。もちろん、その不快の原因や経緯を公表すれば敵をつくり、世間から悪者扱われることは身に沁みて知った上でのことである。

白神山地の世界自然遺産登録にあやかり、その二十周年記念のお祭り騒ぎ、つまりイベントを当て込んだ「白神財団」なる団体から「カネはあるけど何をしたいかわからない」と言って相談を持ちかけられた。「市長が三百万円を出してくれた」と真偽のほどは定かでないが、いかにも胡散臭いことを平然と口にするあたりが、やはり胡散臭い。市長のちょうちん持ちなのだろうか。

しかし、相談したいと言うのだから悪事でなければ知恵を貸すのは人情であり親切というものだろう。

私は白神山地の世界自然遺産に相応しい地元地域社会のあり方として、ブナの自然と一体化した景観づくりを実施しているのだが、それに関する経緯を説明し、実際に現場にも案内し、「白神財団」なる団体にもブナの植樹を勧めた。そして、当該森林管理署から無償

でブナの苗木を提供してもらった約束をしていたので、「白神財団」なる団体にも無償で苗木の提供を受けられるように代表をつれて当該森林管理署に挨拶にも出向いた。

ここまではいいのだが、ブナの植樹を自分たちの事業にしてパンフレットを作成し、行政を後ろ盾にイベントの一環に組み込み、市長とともに派手なパフォーマンスを演じたのだった。私から見ると自慰行為も甚だしい。

この件について、知人の新聞記者から電話で問い合わせがあり、ブナの活用による街の景観づくりを自分たちのオリジナルのように喧伝しているが、あれはパクリじゃないか、と言うのである。パクリかどうかは知らないが私が勧めたのだと伝えた。

「まあ、誰がやっても、この地域社会が結果的にブナと一体化し、そのことが市民に理解されるのであればそれでいいんじゃないの」

ところが「白神財団」なる団体は、私が無償で当該森林管理署からの提供を受けることになっていたブナの苗木を、私に知らせることなく買い取ったのだった。管理署から電話があり、担当者が言うには、「白神財団」が買い取ったからにはそれと帳尻を合わせなければならぬので、私の団体にも有料にしたいとのことなのだ。私が実行委員長をしている団体は西目屋村の役場に事務局があるので、私は役場の担当者に事情を説明し、苗木を買い取ることで事態の収拾を図った。

私に言わせれば、「白神財団」なる団体の態度は「恩を



この説明文の内容は、反対運動の実績を認めたくないからなのだろうか

1981年6月、森吉山で撮影されたクマゲラの給餌



仇で返す」ことに他ならない。私は「白神財団」なる団体がブナを植樹することについては私が提案したことなので異論はない。が、私に相談もなくブナの苗木を買い取ったことについては、非礼に値するものだとして注文をつけた。言うべきことは、知らぬ振りなどせずと言ったほうがいと判断したからである。しかし相手は、理解できていないような非常識なポカンとした顔をしていた。

私は自分で実践し続けている「育林・再生・活用」をテーマにしたブナの植樹活動の一環として計画通りに弘前学院大学の看護学部にて、この年(2013年)、ブナの苗木を植樹した。これに先立ち、「白神財団」なる団体の窓口になっている弘前市役所の担当者から、自分たちも参加したい旨の連絡が西目屋村の担当者を介して私にあった。私が実行委員長をしている団体が、「白神財団」なる団体と別々にブナの植樹を弘前市内で実施することに、その経緯を知らない弘前市役所の担当者は不可解に思ったらしく、それについても西目屋村の担当者に尋ねたとのことだった。私たちの団体は世界自然遺産に白神山地が登録される以前の1990年からブナの植樹を実施しているのである。この点、世界自然遺産二十周年に便乗した、市長の御用団体たる「白神財団」とは質において異なる。

弘前市役所の担当者の申し入れにはやぶさかではない。私は快く受け入れた。

あれから三年後の今年、「白神財団」なる団体が弘前駅構内に、観光客向けと思える、白神山地の世界自然遺産を説明するスライド式の電飾看板を設置した。

通りがけにちょっと見ただけなのに驚くべきデタラメな内容である。私はこの人たちはデタラメなことしかできない団体なのではないかと疑念を抱いたほどだ。曲解、捏造、盗用と思える個所が少なくとも二ヶ所にあった(写真参照)。

白神山地に見られる世界自然遺産のブナ林地帯が残されるに至ったのは、伐採を目的にした林野行政の林道計画に反対運動を展開し、それが成功した賜物なのである。それが「白神財団」なる団体の説明ではこうなっている。「ブナの木は従来、椎茸栽培以外には役に立たない木であったために伐採を免れた」臍で茶を沸かす、とはまさにこのことで自らの恥さらし以外の何者でもない。

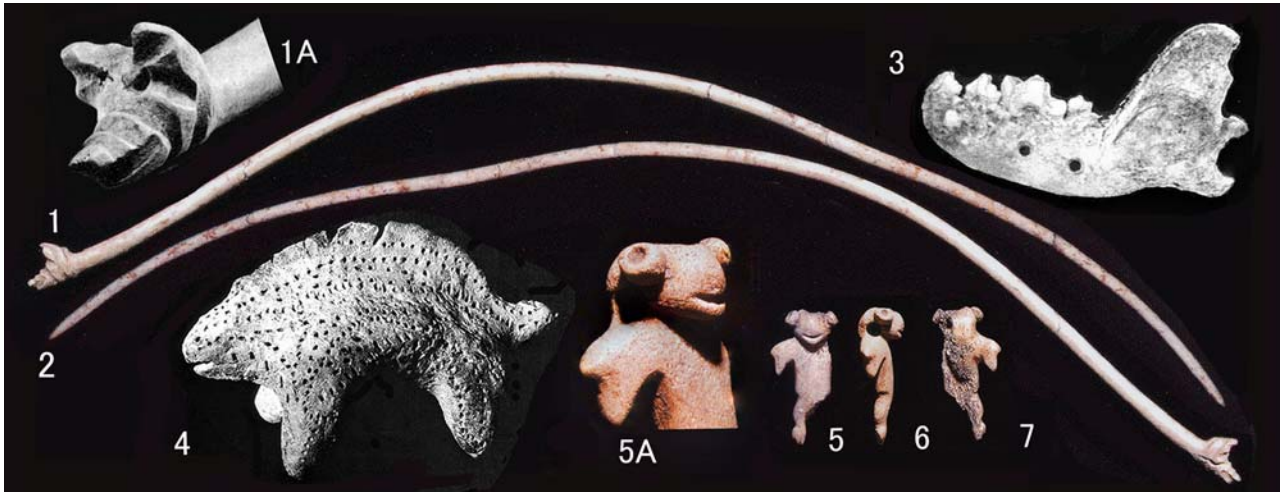
さらにクマゲラの写真が目についたのだが、これは白神山地ではなく森吉山で撮影されたクマゲラである。これだと弘前の街並だと偽って青森の街並の写真を使っているのと同様、インチキではないのだろうか。しかも、この写真は『クマゲラの世界』(小笠原暁著・秋田魁新報社)66ページ下段からの複写である。許可の得たのだろうか。

「犬猫看板」にしてもゴルフに関わる問題にしても、行政や為政者という支配者が背後に絡むと、市民はまるで、刺激を受けたイソギンチャクのように敏感に口を硬く閉ざす。行政や為政者もまた、上位には同じような対応を見せる。ここでは市民を含む、上位から下位まで同心円の関係をなしているのである。私の故郷のこの地域社会では、その上下関係さえ満たせば、たとえ非常識なことでもまかり通ることが問題なのである。

縄文人の狩猟 -2

金子浩昌 (東京国立博物館客員研究員)

貝島貝塚・縄文時代中期～晩期 1～2: 獣首彫刻の棒状品・鹿角製-43.5cm。1A: 獣首斜正面。3: オオカミ左下顎骨。
4: イノシシ形土製品-87.6mm。5～7: カエルを表現した彫像-40.2mm。5A: 5の頭部拡大。



骨角製品の数々

世界の先史、原史の考古学遺跡で出土する骨角製品で縄文文化の人々ほどに骨角製品を製作した人はいないでしょう。しかもその製作の技術のレベルの高いこと超一流であったといえます。硬い鹿角を擦り切るところまでは共通するのですが、その先複雑な彫刻、切り込み、大小の円形穿孔はまねのできる技術ではなかったのです。

イノシシ、ニホンジカは植物質では作り得ない道具の素材を提供してくれました。イノシシの犬歯の鋭く、滑らかな光沢と半円形の湾曲は各種の道具、装飾品の素材として第一級品でした。ニホンジカの角は数あるシカの仲間の中でもっとも均整のとれた湾曲と枝ぶりをもち、それから様々な形を切り出し彼らの好みに合わせた製品を作り出しました。釣針とか鉾頭、鏃などは形から用途を推測することができますが、現代人には使い方、作り方など考え付かないものもあります。どれにも作者の深い意図が込められたのでしょう。その謎解きが骨角製品の魅力の一つです。

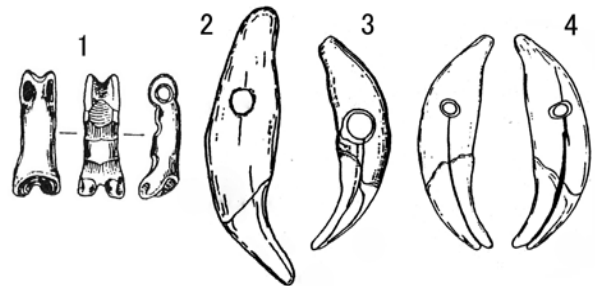
ただ、動物遺体、多種類の骨角製品が長い年月の間残るのに適した土壌は、日本ではごく限られた条件の場所でした。ようやく残された動植物関係の諸遺物は、当時の縄文人の生活と文化を考える上でのかけがえない宝で、長く守り伝えていかなければならないでしょう。

各地の遺跡にみる陸生獣類の狩猟

縄文遺跡でもっとも多く出土するのは平野から山麓

にかけて棲息するイノシシ、シカですが、ごく稀に山地帯に棲息するクマ、山岳棲のカモシカ(急峻な海岸域でも)を主として捕獲している例もあります。そのような例は山地の洞穴遺跡ですが、遺跡例はごく少なく、その一つに中村考三朗先生によって調査された新潟県室谷洞穴があります。先生に依頼されて、そのような洞穴の動物遺体の調査を概要でしたが報告しました。それはちょうど平野部の貝塚遺跡で、シカに当たるのがカモシカで、イノシシに当たるのがクマになると説明をしました。このような説明は平野部と山岳部の動物相の比較をしたときの感じでした。

平野地帯の貝塚遺跡でもクマの犬歯、指骨の出土することがあります。犬歯は穿孔されていますし、指骨は彩色され、穿孔されています。垂飾品です。しかしそのような加工品は大変に少なく、また縄文後期以降の例が多いようです。千葉県市原市西広貝塚は後～晩期の大規模貝塚ですが、上記のクマの指骨加工品は唯一あったのみでした。このクマがどこで獲れて、どの



1: 加曾利南貝塚材ノグマ基節骨30mm、2: 姥山貝塚材ノグマ犬歯69mm、3: 富士見台貝塚材材ノ犬歯53mm、4: 武士遺跡材材ノ犬歯53mm。

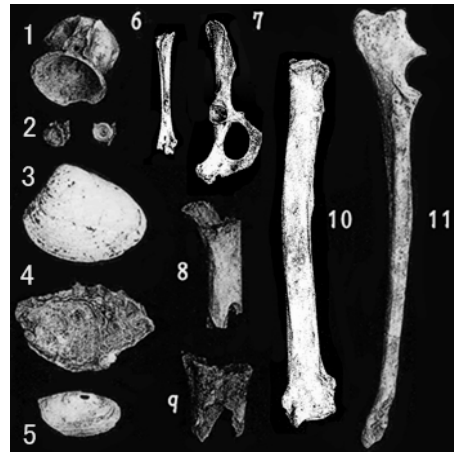
ような経緯でこの千葉県市原の地にまでもたらされたのか、そしてどのような人が身に付けていたのか。クマの捕獲されること自体が少ないのですから、手に入れることも容易ではなかったことが考えられます。西広貝塚の獣骨、骨角製品については同市埋文センターの鶴岡英一氏による分析が報告されています。

東北地方にいくとやや増えるようです。仙台平野の最奥、北上川の中流域、湖沼が今も残る地域に、**岩手県花泉町貝島貝塚**があります。後期後葉期の例ですが、ツキノワグマの犬歯4点中2点に穿孔、2点は未加工でした。四肢骨は検出できませんでした。オオカミの犬歯、下顎骨穿孔品は岩手県内の下記の遺跡でも検出できなかったものです。さらにオオカミの頭部を彫刻した鹿角棒はオオカミの製品を芸術の高さに作り上げたのです。しかし、それだけではありませんでした。カエルのようなひ弱な動物たちにも向けられ、その動物が集落を取り巻く自然と深く関わることを認識して、その塑像をみごとに鹿角でつくりました。カエルの顔して、姿は人でした。カエルと人との合体です。作品は品格のある像です。自然を愛し、どんな動物ともつき合っていきたい、いろいろな動物との関わりを大切にしようと考えた村人の一人がそっと胸に下げたのではないかと私は考えるのです。

三陸地方にはリアス海岸の台上に縄文貝塚がつくられています。この地域のすばらしい漁撈の自然環境の中で骨角器文化が形成されましたが、狩猟への思いもありました。

陸前高田市中沢貝塚（後期後半から晩期前半）では穿孔品として、イタチザメ歯1、ツキノワグマ基節骨1、オオカミ第2上顎臼歯（欠損、歯根部に穿孔した例）、オオヤマネコ上顎犬歯1。

大船渡市日頃市町関谷洞窟（晩期）ではオオカミの橈骨、尺骨一対が搬入されています。骨製品の素材として利用しようとしたのでしょう。またオオワシ末節



大船渡市
関谷洞窟
1:マロ、2:アヲケ
3:ハマグリ、4:マガサ
5:カシヅメ、
6:サ、7:ウサギ
8、9:カ
10、11:材木

骨穿孔品が異彩を放っていました。

宮古市大字近内^{マカイ}中村（晩期前半）、縄文人とイヌとの合葬、シカ、イノシシ、ツキノワグマの頭骨だけがまとまっていた。その一画からツキノワグマ犬歯の穿孔犬歯 8点が楕円形に並ぶように出土したといいます。海辺にも近いが北上山地の真ただ中の遺跡。このような場所から犬歯製品が分配されるのであろうか。そして、これから北上山地の北端地域になります。青森地方への供給地になっていたかも知れません。

久慈市双子貝塚ツキノワグマ犬歯、イヌ犬歯。不明犬歯1のいずれも穿孔品です。

青森県下の縄文貝塚でもこのような貝塚遺跡をみます。最南部にあるのが寺下遺跡です。

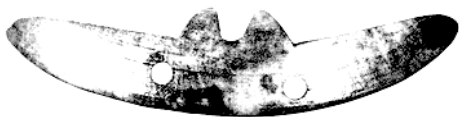
三戸郡階上町寺下遺跡

鹿角角座と第一枝 大洞C1期三叉文彫刻、穿孔品では、イノシシ下顎犬歯♂12、同♀犬歯1、同下顎切歯1、イヌ犬歯4完形は1で他は歯冠部のみの切断品に穿孔、クマ末節骨1、シカ下顎骨1があり、多数の骨角製の漁具が出土。装身具類がイヌとイノシシ犬歯が主でしたが、動物遺体にはオオカミの下顎骨、上顎犬歯、ツキノワグマ下顎犬歯もあります。北上の山地帯をはずれると違いが出て来ようようです。貝塚の魚もカサゴ、アイナメが主で北方的です。

北海道に入るとやはりキタキツネ、ヒグマが増えますが格段の増加ではないようです。本州の例と比較するために骨角製品の出土例でみます。

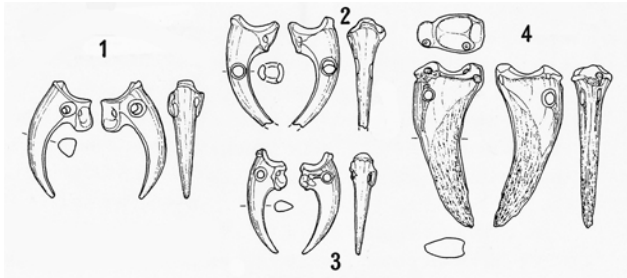
函館市戸井貝塚（中期末葉～後期前葉）は外海に面した貝塚です。次のような動物骨の穿孔垂飾品がありました。サメ類（メジロザメ類、アオザメ2）の歯10、ワシタカ類の末節骨、キタキツネ犬歯8、オオカミ犬歯2、イノシシ下顎切歯1、ヒグマ中節骨4、アシカ類類歯1。

伊達市入江貝塚（後期後葉）サメ類3、ワシタカ類



上:大船渡市大洞貝塚-イノシシ♂下顎犬歯
下:宮古市近内中村遺跡-クマの犬歯。一括の出土品。

北海道入江貝塚 1:ワシ類末節骨-36.4mm、2:ワシ類末節骨-36.3mm、3:ワシ類末節骨-33.5mm、4:ヒグマ末節骨53.8mm。



の末節骨3、キタキツネ下顎骨1、犬歯8 鰭脚類犬歯7、ヒグマ末節骨1、イノシシ下顎犬歯3

コタン温泉遺跡(後期中葉) サメ類3、キタキツネ下顎骨4、脛骨近位骨端3、犬歯2、

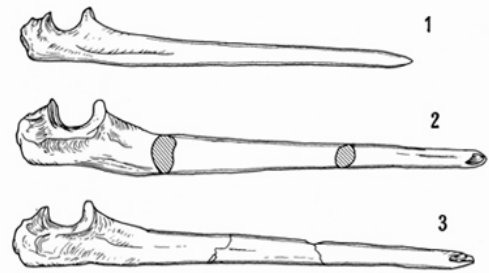
北海道南部地域の例ですがキタキツネの歯牙、下顎骨、ワシタカ類、ヒグマの使用例の多いことが特徴的にみられます。

中小獣類について

中小型の獣類で狩猟の対象になったのはキツネ、タヌキ、テン、カワウソ、イタチそしてムササビも遺骸を残しています。これらの種類が同じように出土するのではないのですが、本州、四国、九州に例などでみますとタヌキの出土例がもっとも多いようです。平野地帯の人の生活領域にも近く棲むためでしょう。キツネになると遺骸の出土例はずっと少なくなります。棲息の個体数が少ないこともあるのでしょうか。北海道では確かにキタキツネの出土例が多いようです。犬歯の穿孔品を多く見ます。

カワウソはかつては北海道から九州に至る各地で棲息していたので、その遺骸を出土することがあります。毛皮の優れていたこともあったのでしょうか。巧みに水泳ぎをする姿に引かれ、この獣の下顎骨に縄文人の好んだ土器文様を彫刻した例があります。北海道烏牧村栄磯洞穴遺跡の出土品です。土器の文様は制作者の出自を現す重要な記号です。カワウソが自分たちと同じ仲間とも考えたのでしょうか。大変に珍しい例です。といってタヌキを粗末に扱ったとは思えません。タヌキ、キツネの下顎骨に着色して穿孔した垂飾品の出土例をやや多くみることができます。みちかにいた獣ですから、親しみがあったのでしょうか。特に印象のあった個体の骨格の一部を残し、その個体の形見に残すとか、自然の姿にあやかりたい思いがあったのかも知れません。それとて誰でもというわけではなかったと思います。それなりの見識のある人物が身につけたのでしょうか。ムササビのような飛ぶ獣を捕ることは難しかった

1~3:横浜市青ガ台貝塚(縄文後期)ニホンザル尺骨の刺突具



ように思うのですが、樹上で休んでいるときなどは、狙い易いのかも知れません。

ニホンザルを縄文人はどのように見ていたのでしょうか。今の猟師の間では人に似たしぐさをするので好んでは獲らないというのです。そこは、縄文人の面目躍如たるものがあるのでしょうか。獲物と人とははっきり区別していたようです。ですから機会があれば捕獲しました。サイズからみてタヌキなどよりも価値があったと思います。先にも述べた千葉県市原市の後期貝塚、西広貝塚の例ではタヌキに次いでニホンザルが多かったのですが、神奈川県横浜市称名寺貝塚D地点貝塚という後期の後葉期貝塚の動物遺体には多くのニホンザルの遺体があり、その年齢構成を調べるとオスのオトナザルでしかも年齢を経ている個体(13~14歳、さらに16歳以上)が多かった。今の猟で群れのリーダーが逃げ遅れて狙われるということがあるといいます。

ニホンザルの犬歯に穿孔した例は千葉県市原市西広貝塚の出土例があり、珍しいものです。横浜市金沢区青ヶ台貝塚からは後期のニホンザルの尺骨製の刺突具があります。サルの太い丈夫な尺骨を刺突具として利用したのでしょうか。動物の骨格の形状を実によく見ているのです。

ネズミ類の積極的な捕獲はあまりなかったのではないかとと思うのですが、保存した食べ物を守るための努力は大変だったのではないかとと思うのです。偶然の機会に骨格の一部がのこることはあったのではないかと考えられます。

大型食肉獣類の歯牙穿孔品

ツキノワグマの犬歯加工品2例の出土例が滋賀県石山貝塚で報告されたときは私達を驚かしました。しかも早期のものだったからです。

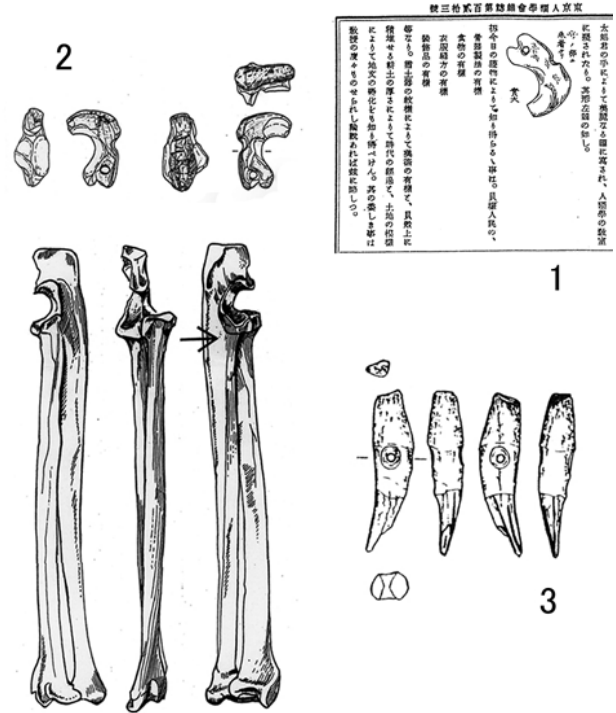
オオカミの遺体が遺跡で一個体でもまとまって出土することは極めて稀なことです。犬歯、下顎骨、四肢骨の一部が何らかの加工痕の付いた状態で出土するのです。オオカミの遺体が縄文人の手に入ったときにす

でに遺体は原状の状態ではなかったということが推測されるのです。どのような状態であったのか、想像することもできません。オオカミの歯牙、骨格には切断、穿孔などの人手が加えられていました。それらは垂飾品として加工されたものです。そしてそのような加工品の出土するのは普通は一遺跡1点位で、それ以上の出土はごく稀なことです。犬歯の穿孔品が一遺跡で2点した例で西日本の例ですが縄文晩期の**奈良県橿原遺跡**があります。戦中の調査で戦後に大部の報告書が刊行されましたが、2点のオオカミ犬歯の穿孔品がありました。周囲を山に囲まれた環境でオオカミに接する機会も多くなったのかも知れません。地域的にも違いがあるようです。東北地方の貝塚遺跡からの出土例は多くなります。**岩手県花巻町貝鳥貝塚**（後期末葉）ではオオカミの下顎骨に穿孔した垂飾品が出土していることは先にも述べました。下顎骨の犬歯の部分は切断されています、おそらく犬歯は別に垂飾品とするために切断したのでしょう。下顎枝の部分は残され、前臼歯2点、後臼歯2点が残されていました。臼歯の磨滅進み、下顎骨骨質が頑丈なところからかなりの年齢の個体ではなかったかと思われます。タヌキ下顎骨の切断穿孔品も出土しています。

考古資料にオオヤマネコがあるということに私も早く（1952年頃）気付きました。千葉県佐原方面でいっしょに遺跡の調査をしていた石橋 直という方が、市内の田地の工事現場で採集されたという犬歯の穿孔品を私に示されました。それがかつて考古資料ではみたことのない大形ネコ科のものでした。穿孔の位置がこれまでに縄文遺跡でみてきた例と比べて歯根の上端に開けているのが気になりました。日本以外の場所で作られたものかも知れないという不安もありました。しかしその後、東北地方を主として遺跡から出土する確かな遺物が知られるようになりましたが、私もさらに各地の遺跡からオオヤマネコの遺骸のあることを確認することができました。それは北海道から四国に及びました。その中で興味深かったのは**東京都北区西ヶ原貝塚**出土のものでした。それは1896（明治29年）にすでに知られていたものでした。発掘された方が東京国立博物館に寄贈されていたもので、それを実査することができました。北区による西ヶ原貝塚の調査が行われていた折でした。それは発見者によって実測図と共に「鹿の背骨製全体朱塗りの勾玉」として人類学雑誌に紹介されていたものでした。それを改めて子細にみるとオオヤマネコの右尺骨近位骨端から滑車切痕部を使って勾玉型を作り出したのです。縄文後期の頃、この

オオヤマネコの垂飾品とその素材

- 1: 1896人類学雑誌、2: オオヤマネコ尺骨と垂飾-19.3cm、
- 3: 市川市堀之内貝塚・オオヤマネコ犬歯-43mm



地に住んだ縄文人がオオヤマネコと何らかの接触があったものと思われます。オオヤマネコの骨格はこの時の発掘では全く検出することがなかったので、素材となった尺骨をどこで入手したものか、これがどのような獣のものなのか承知していたのか、ということも定かではありませんが、勾玉型に作り上げ、朱彩までしたということは、それが特別なかたちで、つまり日常的にみる獣の形とは違っていたということは認識していたのではないかと。その骨格をみごとな装飾品にまで仕上げた縄文人の感性に感動するのです。

そして同じように感動的なのは縄文人と生活を共にしてきたイヌたちとの関わりでしょう。ここで縄文犬のことについて多くを語る余裕がないのですが、北海道、東北地方ではやや大きく中形、それ以南では小形犬です。日本列島の北方域には海棲獣類の狩猟を主としている先史、原史時代住民がいましたが、彼らとの決定的な違いはイヌに対する扱いで、北方狩猟民はイヌを食料として扱っています。幼犬はもちろん成犬まで育つと食用としています。縄文犬についてのそうした扱いを確認することは困難です。幼犬、成犬ともに丁寧に埋葬しています。イヌの犬歯を穿孔して垂飾品に使われている例がありますが、タヌキ、キツネの例よりも少なく、下顎骨まで使うことはありません。